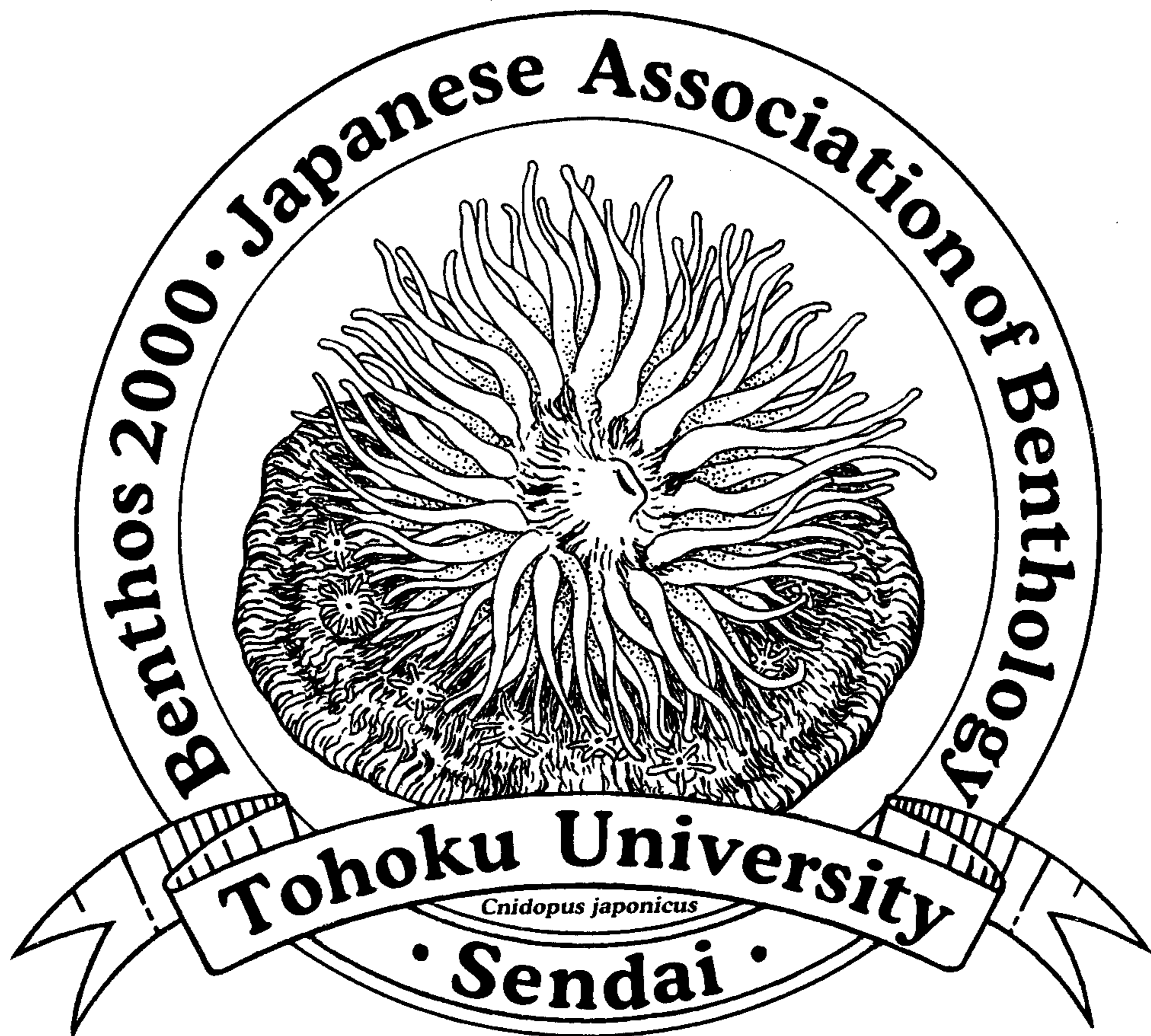


# The 14th Annual Meeting of the Japanese Association of Benthology

October 14 - 15, 2000  
Tohoku University, Sendai

## Program and Abstracts

公開シンポジウム： 干潟の多様性と保全



プログラム・講演要旨集

日本ベントス学会 第14回大会  
2000年10月14日(土) - 15日(日)

東北大学・仙台

## ウズマキゴカイ科とカンザシゴカイ科(環形動物門、多毛綱)の発生と繁殖生態について

\*E. K. Kupriyanova (Flinders University, Australia), 西 栄二郎 (横浜国立大学教育人間科学部, H. A. ten Hove (Zoological Museum, University of Amsterdam) & A. V. Rzhavsky (A. N. Severskov Institute, Russian Academy of Sciences, Moscow)

ウズマキゴカイ科やカンザシゴカイ科は石灰質の棲管を作り、その中に棲む。一生を棲管の中で過ごし、管から取り出すと新しく管を作り出すことはない。汚損生物として知られ、カサネカンザシやカニヤドリカンザシなどは生態や発生に関する研究例が多い。国内からは百を越える種類が記録されているが、分類学的研究が遅れており、未記載種や日本新記録の種も今後数多く記録されていくと思われる。

ウズマキゴカイ科は、全ての種が棲管の口から広がる鰓冠の一部が変形した鰓蓋の中や、棲管の中で子供を保育する習性を持つ。保育習性によって属や亜科の分類が成されているが、発生や保育習性の細かな記載はほとんど行われていない。カンザシゴカイ科においても棲管の中で幼生を保育する習性を持つものが知られている。これまでの発生や繁殖生態の知見を要約し、ケヤリ科など近縁と思われる分類群との比較を行いながら、繁殖様式の進化について考察する。

### 精子の形態と繁殖様式の関係

多毛類の精子の形態は、海水中に抱卵放精するタイプと幼生を保育するタイプの種群で明らかに形態が異なる。精子の形態と卵の大きさ、保育習性との関係についても考察する。

Development and Reproduction of Spirorbidae and Serpulidae (Annelida, Polychaeta)

Elena K. Kupriyanova, Eijiroh Nishi, Harry A. ten Hove & Alexander V. Rzhavsky